

---

翻 訳

---

## 古い友人への手紙（後半）

ベルテレ・ブラウンフェルス（旧姓：ヒルデブランツ）

最 上 英 明 訳

ベルリン滞在中の長い別れのあと、1904年の春に彼はまたフィレンツェにやってきました。今度は《ミサ・ソレムニス》を持参しました。この曲にすっかり夢中になっていたのです。スコアから見事な演奏を聞かせてくれました。すでに書いたように、彼が心を奪われていたのは、晩年のベートーヴェンでした。私から見ても、晩年のベートーヴェンに没頭することで、彼の作曲の才能が粉々になったのではないかとすら思いました。到達不可能なものを追い求めていたからです。当時はまだ作曲活動しかしていなかったことを考えてみてください。彼の作曲の純粹さについてはもうお話しした通りで、私はすっかり魅了されました。リーツラーも言うように、彼の作曲の才能にきらめく真の独創性が、後年の演奏家としての才能にも及んでいるのは本当でした。

彼はベルリンにいるのが好きではなく、郷愁にかられていましたし、私もよくなかったようです。彼が手紙を書いてきました。「私たちの愛を、できるだけ長くしっかりコントロールすることが私の義務であるのは知っている。君は手紙で、山々に囲まれ、やまびこが聞こえるようなきれいな土地での孤独な生活について書いている。そして、それが私に相応しいかどうかかわからないという。可能であれば、そうした生活はもっとも素晴らしいものであろう。しかし君は私にそう書いてはいけないのだ。それを考えるのを、今はできるだけ抑えなければならないのだから」。さらに書いてきました。「君の期待通りに外向きに生きるのは、私の意志ではないし、私の責任で

もない。外向きに生きることが、ここでは押しつけられるのだ。内向きに生きる君の生き方が、私から遠く隔たっているわけではない。いずれにせよ、最愛のものは君自身、君に関するものすべてだ」。

私も彼にとっては思慮の欠けた障害でした。というのも、彼は外向きの生き方を身につけなければならなかったからです。彼にはとても難しく、人づき合いに悩み、極度の孤独に陥り、「尊敬できる人などまったくいない。偉大なものや美しいものについての考え方が、みんなまったく違う」とまで書いてきました。

イタリアで彼はまた元気になり、幸福感に満たされ、シエナやその周辺にも足を運び、彼の父の旧友のところに滞在しました。私はもう彼の妨げではなくなり、愛が彼を元気づけました。

彼は他人を厳しく評価することはなく、とても寛大で、高潔そのものでした。イタリアで過ごしたあと、彼はまたタンネックから手紙をくれました。「私が最近抱く考えや、そう言ってよければ一連の感情は、きわめて内面的で素晴らしい喜びをもたらしてくれ、『高潔』以外の言葉で呼ぶことは不可能だし、その言葉がもっとも適切な表現だ。たくさんの素晴らしいものがそれと結びついているが、ほとんどの場合は愛と君だ。君がそれを私に初めて教えてくれたのだと思う。しかし、これ以上君と親しく結ばれることはできない。私の願いは一面的なものだし、そもそも私の存在などちっぽけなものなのだから。でも君には考えて欲しい。私がこれ以上望めるものが何もないのをうれしく思っていることを」。次のような手紙もくれました。「ここでは晩によく空想する。私は非難されたが、それを伝えたかったのは、私の空想について理解して欲しかったからだ」。また別の手紙では「私は森の中に座っている。巨大な木の下だ。今日は特に孤独で、心は君のもとにある。私はときどき、暗いぼんやりした衝動を感じ、それが細々とした考えや感情をもたらしてくれる。しかし、明瞭ではなく、落ち着きもないのだ。あれやこれや望んだり望まなかったり。私が仕事していることや達成しようとしたことが思い浮かばないと、いつも病気になったような気がする。私はいつも何かが思い浮かぶのだ。せめて、それに着手できればいいのだが」。この手紙は、彼の才能の中に見られた優れた探求心や野心がはっきり表出されたものでした。「今日はゲートをかなり読んだ。イタリア時代の手紙の巻から、強い印象を

受けた。ゲーテの手紙にまったく興味のない人たちがいる。重要なものは、すべて作品の中に書かれているからだという。しかし、私は手紙が素晴らしいと思う。あのゲーテ自身が間近に迫り、いつもとまったく違う表情を見せるのだ。いつもは煩わしく感じる固苦しさがない。まったく素晴らしい冷静さ、真に偉大な精神の広大さと力が手紙にはある。君にも何か知って欲しい。君に言いたいことを感じてくれるだろう。私がゲーテに負っていること、ゲーテに影響を受けたこと、それは測り知れない」。

彼はいろいろなものを見せてくれたり、一緒に本を読んだり、演奏してくれたりしました。タンネックから手紙をくれました。「私はモーツァルトの交響曲のスコアを持参し、今弾いている。君のところに行ったら、演奏してあげよう。本当に素晴らしい」。彼はモーツァルトの交響曲に熱心に取り組んでいました。私の牧歌劇も気にかけてくれ、オーケストレーションを手伝ってくれるつもりでした。「君の牧歌劇はどんな具合？ 努力を惜しんではいけない。この曲のことを思うたびに、いつもうれしい気持ちになる。君が作曲している牧歌劇の形式も、幸せな本能によって導かれたものだし、まさに君だけに相応しい形式だ。オーケストレーションの手助けができるのが楽しみだ」。

さらに手紙がきました。「私はこの世の何よりも君に夢中だ。君以外に美しく愛すべきものがあるなんて、想像できるだろうか」。また別の手紙もくれました。「ときどき、君についてのこうした喜びに包まれる。私には君がいることがどれほどの喜びか、君にはわかるまい。自立や自由についての独自の感情も生まれてくる。もし何か望めるならば、君にそのことをもっとはっきりと感じて欲しいことだ。私に君がいるのは何と神聖なことか。他に言葉は見当たらない。ときどき、自分のことだけを考えると、私は本当に果報者であり、望むことが可能で許されるものはすべて持っているような気がする。いつか終わりが来るかもしれないという不安の感情さえ湧いてくる。しかし人生、さらには君や自分の音楽に巨大な要求を課すことにしよう。君と音楽という二つの太陽は、今までにも光を十分にもたらしてくれた。特に君は何千倍も」。この手紙を貴女に紹介したのは、彼がいかに人を深く愛することができたかを知ってもらうために過ぎません。

1904年から1905年にかけての冬、彼はミュンヘンに滞在しました。私のところに

来たとき、私は床にひざをつき、腕を彼のひざの上にもたせかけていました。すると彼は「作曲家として、私はどれだけ偉大になれると思う？」と尋ねてきました。私は過大評価して「ブルックナーのようになれるわよ」と言いました。すると「どうしてベートーヴェンのようになれると言わないの？」と、彼はすっかり失望しながら答えました。彼は限界を知ろうとしなかったのです。

当時の彼は、ワーグナーにもしだいに理解を深めるようになりました。「ワーグナーはベートーヴェン以降、シューベルトと並んでもっとも偉大な作曲家だと思う」。《指環》をととても見事に演奏してくれ、ワーグナーにほとんど縁のなかった私でも感銘を受け、《ジークフリート》第3幕の演奏は忘れがたいものでした。これほど美しい彼の演奏は、もう二度と聞けませんでした。

彼の精神的純粋さについては、もうお話ししました。彼の著しい特色はそれでした。まったく並外れて純粋だったのです。あらゆる価値あるものに、彼は畏敬と敬虔の念をもって接しました。そういう感情はまったく子どものときから、彼の身についたものだったのです。あらゆる偉大なものに対する敬虔な感情が彼の中にあっては、そのためにすでに子どものときから、精神的内容のある人だという印象を強くしたのです。フォルテッシモからピアノッシモに移行する音や、和音の響きを聴いただけで、彼は敬虔な気持ちに包まれてしまうのです。これまで私が聴いたり接したりした音楽家の中で、彼ほど畏敬の念を豊かに持っている人はいません。豊かな畏敬の念に貫かれたこの姿勢にこそ、彼の音楽のユニークな意味があるのです。彼の演奏が、その音楽が作曲された時点に限りなく近づき、まるで彼自身がそれを初めて聴いたり指揮したりしたかのような印象を与えるのは、こういう姿勢があったからなのです。何かが心に浮かんたり、ひらめいたりする瞬間のように、唯一無二の演奏がなされました。ベートーヴェンの曲の緩徐楽章、たとえば《第九》でも、後年は他のどの指揮者も真似できないような息の長い、詩情に満ちた演奏でした。のちに彼が「私はずっと音楽愛好家のままだった」と語ったことがありますが、畏敬の念を持っている者だけが言える偉大な言葉です。録音技術が進んだ時代において、方向性の違う彼は唯一無二の存在でした。トスカニーニはいつも巨匠で、フルトヴェングラーのような流儀をディレッタントと呼びました。トスカニーニのレコードは彼のすべてが投影されています

が、フルトヴェングラーは違います。フルトヴェングラーが勝っているのは、演奏が生き生きとして躍動的で、創作された状態により近いと感じられることです。レコードではその精神性をすべてとらえるのは不可能です。彼の後年の指揮については昔から貴女に説明しようと思ってはいたのですが、今は話をそらさずに、当時の彼に話を戻します。

1905年の春も私がイタリアへ出かけたとき、彼は来ませんでした。長い別れが続きました。彼は手紙をくれました。「今日は素晴らしい平穏な日だ。驚くほどたくさんのことに喜びを感じる。おそらく、ずっと前から読んでいたホメロスを今日もまた読んで、新たな喜びを与えてくれたからかもしれない。私のはっきり感じるのは、芸術だけが唯一、刺激も何も与えてくれないものがある一方で、モーツァルトのように他の何よりも素晴らしく、価値あるものに思えるものがあることだ。芸術も状況次第なのだ。まさにすべての日常的で平凡なものを高め、素晴らしいものにする方法が重要なのだ。そもそも、日常的生活しか存在しないのだから。もちろん、当時の日常生活は無限で多彩だったという違いはあるが。本当はいろいろ考えて、君に言わなくてはいけないこともたくさんあるのだが、君にはあまりに男性的過ぎる世界の話のような気もする。いずれにせよ、君に読み聞かせよう。最後にわからなくなるような心配をするのはいやなので。

君が『ヴィルヘルム・マイスター』を楽しく読んでいるのは、とてもうれしい。君がしたり考えたりすることを知るからだ。君がそういう本を何も読まないとしても、愛や大事なことに思いを馳せることは知ってはいるが<sup>(1)</sup>。それから彼はプルタルコスについて書いてきました。「昼食後、今はいつもプルタルコスに没頭している。以前はまったく評価しなかった人物なのだが。あちらこちらに魅力が溢れ、自信に満ちた確固たる文章で書かれている。その健康的で男性的なものの見方は驚くべきものだと思う。特に最近の本に慣れた私たちには。彼の書いたものの中には部分的にとっても荒削りでひどい箇所もあり、ある人を怒らせたり、ちょっとした嫌味な事柄もよく書かれている。しかし、そこからもっとも偉大で最強の行為へと靈感が吹き込まれるのが、

---

(1) プルタルコス（45頃-125頃）ローマ帝国時代のギリシア人著述家。

私にはよくわかる。こうしたセンスは、ある意味では歴史上で唯一かもしれない。ベートーヴェンの交響曲のように、見事に本質的で爽快、とても刺激的だ。いつか君と一緒に読みたい。英雄的行為とは何であるかがわかるであろう。「君とものの感じ方が違ってないかどうか、君は尋ねる。一緒に生活しようとすれば、必要なことだからと言う。もし違っていても、とてもうれしく思う。それは私が男なのだから。しかし、私が知る限り、君を私以上に理解し愛せる人間、あるいは私と同じぐらいそうできる人間はいないと思う」。やがて婚約期間が長くなり過ぎて、持続させるのが困難になってきました。彼は書いてきました。「ああ、私はどうしたらいいのだろう。まだ苦難の二年が続くのか。どうして私たちが親しく結ばれてはいけないのか、私にはわからない。私たちがまたしばらくの間、別々でいなければならないとは、何とひどいことだろう。何が私たちを別々にするのだろう」。彼は当時、実際に私以外に親しい人はいませんでした。すべてを私に委ねていました。作曲に不満を感じたときなどには悩み、手紙をくれました。「君以外のすべての扉は私には閉ざされている。私は元氣かと尋ねられれば、『はい』と言わなければならないが、恥ずかしさで死にたくなる。誰も私の心の中を覗いてはいけないのだ」。前はこんな風にも書いてきました。「誰かが私を非難して動揺させても、私には君が帽子のように存在している。私はほとんど君と二人だけでこの世にいるのだから」。

彼には若いときから悪い悪魔がついていました。それは官能の悪魔で、これに彼はひどく苦しめられました。彼は1903年にはもう、ベルリンから書いてきました。「いづれにせよ、私はいつもそれに苦しんでいる。この世での唯一の敵だ。この悪魔が私をすっかり破滅させるかもしれない。私が君をものにする前に、君に不実を働くようなことは、絶対に考えない。私がずっと純潔でいることを、君に約束したい」。当時の彼の信念は純粹で誠実で、彼の本性に深く根ざしていたものでした。1905年にブレスラウからも、友人について書いた手紙をくれました。私もこの友人を心配していました。「ヴォルフが人生を知るといような言い方をしても、まったく無意味だ。本当の希望は、私も彼のように大胆な人間になることなのだから。彼は人間としての強さや自信を得るには、まず危険なことも知る必要があると思っていたのだろう。しかし、知るために経験など必要ないことを、私はよく知っている。官能的欲望など経

験が教えるわけではないし、経験で強まるわけでもない。盲目の抑圧された感情に過ぎないのだから。君が手紙で書いたようなことをヴォルフが言うのなら、私の血が煮え立つ。また彼の悪習を直さなくてはいけない。しかし、彼を批判しすぎたかもしれない。彼には良心をなだめるために、肝に銘じて欲しいものだ。人間は誰でも、最初は習慣によって成長してきたのだから」。

この年はずっと、彼に強い印象を与えた別の女性がいました。ハンネレ・ザトラーという、とても魅力的で絵の才能のある女性で、家族のみんなが詩情豊かで、父親は優れた画家で奇抜な人でした。いかにも彼らしい誠実さを示すエピソードなので、詳しく紹介しましょう。というのは、信頼や人柄のよさが、愛についての彼の考えの根幹だったからです。彼は愛に関してはいつもまったくオープンで、私にも同じような信頼を期待していました。彼は1905年6月、家の庭でのダンスパーティーのことをミュンヘンから書いてきました。「私がハンネレやザトラー一家を好きになった話は、もう書いた。しかしダンスするのを遠慮したり、他の男が彼女を私のところから連れて行ったりするのが、こんなにもつらいとは思わなかった」。私はもうかなり立腹し、私と婚約していることをはっきり明言しなかったことを非難しました。それに対して彼は返事をくれました。「私が無節操で、自分の感情や意見をみんなの前では打ち明けないという非難はその通りだし、昔から後悔してきた。私がいつもそうするのはコミュニケーションのためなのだ。私はそもそも、誰かと対立するのが好きではないし、すべてのものを何らかの意味で可能なものとして受け入れようとするからなのだ。私がよく本当のことを言わないというのはその通りだ。特に神聖な感じがするときなど、できる限り言葉に出さないようにしているので。しかし、私は心から後悔し、自分を変えようとずっと取り組んできた」。それから彼はハンネレに婚約の話はしましたが、ブリックスレグ<sup>(2)</sup>にはよく出かけました。その街で彼女の家族は、チロル風のきれいで古い小さな館を借りて住んでいました。山登りもできる魅力的な土地でした。彼は書いてきました。「ブリックスレグでの数日間の思い出はまだ強烈で、何かと忙しい。人に接して知り合いになる楽しみや幸せは、長い間、私にはなかったか

---

(2) オーストリアのチロル地方にある町。

らだ。彼らの生き方そのものは、平穏で想像力に溢れている。

私は彼らがみんな好きになった。特にあのハンネレ。彼女は不思議な無口な人間で、適切な言葉を口に出すことができないのだ。彼女の興味はさまざまな感情、反抗心、人間性が混じっていて、私が彼女を知るようになるには、かなりの労力がいるだろう。君が私に嫉妬しないといいのだが。私がザトラ一家やハンネレに感じる愛がどのようなものを、君に知ってもらう必要がある。そのために私も安心して君にすべてを書いているのだから。君のことを思うと、幸福感、満足感、喜びが湧いてくる。動き回ってばかりいる私の人生の中で確固とした場所のようだ。さらに《フィガロ》について素晴らしい手紙を書いてきました。「昨晚は《フィガロ》に行き、とても楽しんだ。響きや完成度は、あらゆる音楽の中でもっとも素晴らしい。しかし演奏中もずっと君のこと、君との関係、君の顔、君の喜びが脳裏を離れなかったので、作品がまるで私たちや私たちの愛のために作られたかのように思え、ずっと涙を流さずにはいられなかった」。手紙をあまり書かなかったことや、ブリックスレグに行ったことを彼は後悔しましたが、私が嫉妬したことには怒り、次のように書いてきました。「私には耐えられない。私がすべてを捧げたのに、私を信じられず、四日手紙を書かずにいるだけで悲しいなんて」。彼は私の嫉妬を信頼の欠如と感じていました。

それに対して私は、嫉妬を他人を監視する見張りのようなものと考え、彼にそれがないのを嘆きました。私はとても情熱的な娘だったことを貴女に告白する必要があるでしょう。私は絶対に大事な持ち物のように彼を見守っていました。彼との関係はとても厳格でした。彼がハンネレに強い印象を受けたことだけで、私が嫉妬するのは十分で、最初は彼をすっかり見捨てようとし、彼をととても苦しめました。しかし彼は、プレスラウに行ってから、私と同意見になりました。

彼はブリックスレグへの最後の訪問のあと、手紙をくれました。「ブリックスレグについては、あまり語ることはできない。いずれにせよ、手紙では無理だ。ここ数日はずっと忙しく、昨日やっとここに到着した。歩いて山に登ったが、とても感動的だった」。

彼がその一家から受けた印象はとても素晴らしいものでした。私が訪ねると、ザトラ一家、ドールン氏などと二隻のボートに分乗してシュタルンベルク湖を周遊しまし



た。彼は私の相手をしてくれたので、他の人たちを気にかける余裕はありませんでした。しかし、プレスラウからも手紙をくれました。「私は後悔している。ハンネレとのことはとても醜悪だった。それを取り除くには何をしたらいいかわからない」。彼はこのように、とても誠実な人間でした。私たちは婚約期間が長くなったことに苦しみを感じていました。結婚には機が熟していたのですが、若すぎました。彼は「君からの愛が私にたくさん注がれている」とよく手紙に書いてきました。プレスラウからの手紙です。「こうした関係が決して習慣的なものになってはならず、最初会った日と同じようにずっと新鮮で明るいままでなければならないという気持ちを、君も私と同じように持っているのは、ある意味では都合がいい。しかし、不幸なことではあるが、理性的に断念しなければ、やってはいけないのだ。私たちが考えているような理想的なイメージは、おそらく実現しそうにないのかもしれない。人生ではよくあることなのだろうが」。これが最初の暗い影でした。彼の恐ろしい不眠症が始まったのです。これが悲劇を生みました。彼はその体質を母親から受け継ぎ、この年に突然に表面化したのです。医者が作曲を禁じなくてはならないほどでした。

彼が書いてきた近況は自作の交響曲についてで、その中の楽章のひとつを彼がミュンヘンで指揮したコンサートで演奏したのです。<sup>(3)</sup>美しい緩徐楽章で、好評を博しました。それから、彼の美しい高貴な《テ・デウム》についてでした。彼はその後、タンネックから手紙をくれました。「私は十分に仕事に没頭することができない。体が耐えられないのだ。ずっと不眠症すれすれのところにいる。というのも、《テ・デウム》のように深淵に至るのがわかるからだ」。この不眠症が彼をひどく苦しめました。プレスラウからも書いてきました。「運命とでも呼ぶべきものが、私に何を企んでいるのか、何の役にも立たず、自分にとってもっとも悲劇的な試練を与えられている理由が、私には理解できない」。プレスラウの劇場でのコレペティトゥアの仕事は、あまり幸せではなかったようです。「いつか劇場の楽長を務めることは、ますます不可能に思える」と手紙にも書いてきました。彼は自分があまり信頼されず、劇場全体の仕

(3) 1906年2月19日、現在のミュンヘン・フィルの前身であるカيلم管弦楽団を父のアードルフ・フルトヴェングラーが買い取り、ブルックナーの交響曲第9番を含むプログラムで息子をデビューさせた。

事がいい加減なのに怒っていました。「ひどい音楽がどんなにたくさんあることか、君は知らないだろうし、想像もできないだろう。そんな音楽にみんなが酔いしれ、素晴らしいと思い、泥の中の豚のように転げ回る。モーツァルトやベートーヴェンのような優れた音楽は地味に思われ、直接的に語りかけることもなく、まったく矛盾がないので、そうした人々には退屈に思えるのだ」。さらにまた書いてきました。「このところ、ベートーヴェンへの憧憬を感じ、彼のことをずっと考えてきた。最初に知ったときと同じように、ベートーヴェンは私にはいつも理解が難しい。《第九》のアダージョから逃れられず、すっかりその美しさに気が狂いそうだ」。

しかし、ここからこの物語の悲しい部分が始まります。彼の不眠症が私への態度まで変え、私たちの愛の上に暗雲が覆ったのです。彼はよく憂いに閉ざされ、立ち直るのもかなり困難でした。私たちの長い散歩はたいいてい、自分を喪失し深く悲しんでいる彼を元気づけ、作曲への才能を確信させることから始まりました。散歩が終わると、彼は元気になり、日光のように希望に満ち溢れるのですが、私の方はすっかり疲れ果ててしまいました。もっともひどかったのは、彼が結婚の必要性を疑うようになったことでした。彼が20歳になった年〔1906年〕の春、私たちはブレンナー峠からガルダ湖を通して、フィレンツェまで自転車旅行をしました。私の姉とその婚約者も一緒でした。

そのとき彼は、私たちの関係が結婚にまで進むことはないだろうと言ったのです。私は当時、そんなことは思ってもいませんでした。彼はタンネックからも書いてきました。「君は私にはリアルで朗らかに思える。君との生活も、きっと喜びに満ちたものになるだろう。どんなものからでも素晴らしいものを引き出す君の性格は、私には無上の喜びで、君には感謝しきれない。私をもう弱気で情けない人間だと思わないで欲しい。君が私に気力と必要なものをすべて与えてくれたのだ。まだ八日もたっていないが、私たちが別れなければならないならどうなるかを真剣に考えたのは不思議だ。自分という人間が本当に不安になってきた。私の性質はまったく人と違うらしい。こんな短い期間にこんなにも変わってしまうとは。それに意志をもって自分を抑制することがまったくできなくなったと、はっきり自分で認めなくてはならないとは。いずれにしてもこれまでの自分にはなかったことだ。それ以外に君に話せることは何も

ない。今は輝かしい春の季節なのに、私には万物が生命を失い、思いははるかイタリアの君のもとに向かう。君の家族、お姉さんたちにもだ。君たちのそこでの生活が、そうした感銘を私に与えてくれたのだ。今度もまた」。

それから彼は《ドン・ジョヴァンニ》について書いてきました。「昨日の《ドン・ジョヴァンニ》は素晴らしかった。前よりもよくなった。あのモットルが、《フィガロ》よりもかなり巧みに処理している。私は気に入った。《ドン・ジョヴァンニ》のすべてが自然で単刀直入に進んでいく。故意に様式ばったところはなく、登場人物たちの同時に湧き上がるさまざまな感情の多様性がまったく自然で、《フィガロ》より素晴らしい。この点でホメロスと類似性がある。モーツァルトの様式感覚はしっかりした天性のものなので、様式を単に下敷きとして利用するだけで、作品の骨格として用いることはしない。どんな着想も、最後の騎士長の場面にしても、表面上は当然のように進行する。どの場面も流れるように作られている感じがする。それに対し、例えば《フィガロ》はより人為的で、構築的にまとめられている。芸術作品としては見事だが、《ドン・ジョヴァンニ》の方が自然だ。テキストもかなり関係している。テキストの素晴らしさにまた注目した。まったく最高だ」。

彼がくれる手紙も少なくなりました。それで私は、求婚できるのは女性ではなく男性の方なのだと書きました。しかし、またこうした返事しかきませんでした。「いずれ私たちが結婚すると私も考えているとは思わないで欲しい。しかし、いつも君のことを思っている。この非現実的な世界において、私にとっては唯一現実的で素晴らしいもの、確固として失われることのないものなのだから。こうして私は結婚が何であるかを学んだし、自分が結婚するために生まれた人間だという感じもする。ああ、最初はまともでしっかりした人生を確立すること、それからやっと幸せや人生の進展が生まれる。いずれ私たちが結婚するなど考えるのは、奇妙に思えるのだ。将来の幸せへの甘い感情がいつも私の心を満たしてくれる。どのような運命であれ、まだ耐えていくつもりだ」。

貴女はこれを書いている私の気持ちが想像できるでしょう。私が彼を失望させたに違いないこともわかっています。しかし、それからさらに私を驚かすような手紙も送られてきたのです。「今度は長い休みがあった。木曜日の君の短い手紙をもらったと

き、すぐに返事を書こうと思った。でもそうしなかった。もっぱら君のことばかり想っているが、手紙を書く気にはならなかったのだ。何か重荷を担いでいる感じで、それを君に話したいのだが、自分でもあまりはっきりとはしない。こうしてとんでもない時間に手紙を書くことで、重荷とのつながりが緩まる。苦しいのだが、つらくなくなっても、それを君に書くことはないだろう。私たちが共有する世界がある。私の心からもっとも離れられないもの、他の誰も君のように感じることはないものだ」。手紙のこの最後の部分は、すでに最初の方で私たちの関係の本質を知ってもらうために紹介しました。しかしそれに続く悲しい個所はまだ紹介しませんでした。「今、私たちが会うと、愛と同時に恐怖も感じないだろうか？ 私たちはお互いのもののなのに、別のものに属しているような感じもしないだろうか？ 私にはわからないのだ。私が今、世界をどういう風に考え、人生から何を期待しているのかと君は尋ねる。しかし、私が人生に対してどのように構えているのか、自分でもまったくわからないのだ。君に対してさえどうなっているのか、わかっていないのだから。モデナでのあのおかしな語らいをまだ覚えているだろうか？ あのと看以来、いやもっと前から、私は君の愛にはもはや値しないのだ」。それは彼の疑念から生まれたのです。そしてそれは、頻繁に起きました。「たった今、変な質問を思いついたけど、怒ってはいけない。私たちの結婚に何らかの障害が生じて、結局不可能になり、私たちの間でそれが明らかになったときでも、私が望めば、君は私の愛に応えてくれるだろうか。それとも君が望む誰かと結婚できるなら、私の方を棄てるだろうか。乱暴な質問だと思って気を悪くしないで欲しい。それが気になって、どうしても君に書かなければならないというのが、私自身にもつらいのだから」。

彼は私の気持ちをはっきりさせてくれました。というのは、私には結婚に行き着かない男女の結びつきは想像できなかったからです。私は女性として、ベートーヴェンの《フィデリオ》のような愛と結婚が理想で、彼の愛人になるだけでは耐えられなかったでしょう。彼は私の義兄との散歩のあと、また手紙をくれました。「他人から君のことを聞くと、炎に包まれるような感じがする。私や私の存在全体が君の中だけに埋没し、あとには何も残らない」。それから彼はいつも、自分の仕事について書いてきました。「今日は少しだけ。今、散歩から戻ってきたばかりだから。やらなければな

らないことを考え、数え上げてみたが、思ったより多いことに気がついた。

今はよくオペラについても真剣に考えている。しかし、別の音楽も考えないといけない。私のやり方では、手に負えなくなってきた。一時的に満足することが怖い。君が最大の力となる。君は私には元気で快活で喜びをもたらしてくれるもののすべてだ。人生のすべてを君に感謝したい。

私も実際は君と同じような調子だ。何らかのイメージが大きな役割を演じ、現実のものとなる。しかし、もともと本質から生じたものではなく、まったく実体がない。いずれにせよ、実体は何の役割も演じない。何か曖昧で浮遊しているようなものが私の中にあり、これをこじ開けてペールをはぎ取らなければならないような感じがいつもする。しかしすべての希望、すべての喜びがそこにある。すべてをそれに結びつけようと思う。君をもだ。不思議なことに、私を君に結びつける愛はみんなが思っているような愛という感じではなく、君と一緒にだとか何か別の第三のものの、目には見えないがもっと偉大なものを体験し、賛美するかのような感じなのだ。私には疑う余地のない感情なので、他人が愛について話しているときは、自分のものは決してそこに持ち込みたいとは思わない。

君が本来的なことを何もしなくても、まったく心配する必要はないが、私がまさにこんな感じなのだ。直接に活動するより、目を開いて耳をすまして観察する方が、教養ある人間にとっては相応しいように思えるのだ。いずれにせよ、若い間は。後年になれば、規則的で平穏な人生を歩みながら行動する機会はまだ十分にあるのだから。今はまだ混沌として雑多で、もつれたままでいいのだ」。しかし、彼自身はとても活動的で、体験に結びつく大きなイメージの中で生まれるのが教養だと、優れた理解をしていました。

私も当時、彼に手紙を書きました。「<sup>(4)</sup>ボーツェンへ出かける途上、私たちが話したことをご存知ですか？ 私たちはただ耽溺して満足する恋人同士ではないのです。お互いに強く刺激し合うことで、互いの愛を二倍も強く感じるのは、とても素敵だと思います」。私が夏にイタリアから戻り、タンネックにいる彼を訪ねると、彼は私に言

---

(4) 南チロルの街。1919年からはイタリア領ボルツァーノ。

いました。「父が言うには、娘たちはいつも結婚したがるが、男はまず人生を知り、何ものかにならねばならない。その通りだと思う。全世界に口づけしたい感情に襲われることも稀ではないのだから」。彼の自由への欲求が始まったのです。自分が何ものであり、何をなしうるかを、漠然としながらも感じていたのです。彼の父は、息子がそんなに若い年齢で結婚するのを望んではいませんでした。21歳という若さで、どうして結婚できるでしょう。私たちの愛に忠実ならば。19歳でもう結婚しなければならなかったのに。私は短期間しかタンネックに滞在することを許されませんでした。彼の父が彼を連れて旅行しようとしていたからです。私のことを理解してはくれませんでした。私は彼の父をととても愛していましたし、考え方もよく理解できました。しかし、私たち二人が精神的に一緒に生きていたことや、私たちの関係全体については知らなかったのです。

しかし、タンネックをあとにするその当時の私は、深い悲しみに沈んでいました。また手紙をくれました。「私を失うという不安を抱かないで欲しい。私はすっかり君のものだ。言葉では言い表せないほどの君の高貴な気質を新たに知った。君が身を隠しながら、落ち着いて人生を歩んでいる姿が目に見えよう」。あるいはまた「君に対してこんなに腹を立てられるなんて、私にはわからない」ともありました。彼はすっかり変わってしまい、この先どうなるか、私にも見当がつくようになりました。彼はまた「私たちの意志とは裏腹に、お互いの間は遠くなるばかりだ」とも書いてきました。彼は実際、夏にミュンヘンに来て欲しいという私の願いにも応じてくれませんでした。すぐそのあと、秋から冬が終わるまで、ずっとチューリヒにいないからというのが理由でした。手紙もくれました。「君のような人が私とこれ以上に親密な関係ではあり得ないと知っても、私に何の役に立つのだろう。君をものにしたい強い必要性をあまり感じないのだから」。この言葉が私にどんな印象を与えたか、貴女も想像できるでしょう。私たちは一緒にザルツブルクの音楽祭へ出かけ、マーラーの指揮する《フィガロ》を聞きました。私は大聖堂へも行ってみると、司教がひざま

---

(5) 1906年はモーツァルト生誕150周年の年で、夏にザルツブルクでモーツァルト音楽祭が開催された。ウィーン宮廷歌劇場の引越し公演があり、マーラーは8月18日と20日に《フィガロの結婚》を指揮。中川右介『指揮者マーラー』河出書房新社、2012年、177頁。現在まで続いているザルツブルク音楽祭が創設されたのは1920年。

ずく人々に祝福を与えていました。私は床にひざまずき、祝福を受けようとししました。私は初めてカトリック信仰への憧れを感じました。ヴィリーは私と一緒にには行かないと思いました。彼はゲーテ的で偉大なドイツ理想主義に感化されていたので、彼には難しかったでしょう。私が改宗したとき、「君は私にとっていつもカトリックだ」と言っていました。

彼はザルツブルクでまた疑念に満たされ、手紙をくれました。「今日は君に書かなければならないことがたくさんある。一日中、何もしなかったのは、君にしたことがわかったからだ。はっきりしたのは、私が根本的にはきわめて孤独に生きる人間であること、それを最近によく感じるのだ。誰からも、一番親しく愛しく思っている人からも遠く隔たって、自分ひとりの中に引きこもっているように思えることが、ときどきある。それからまた、私の愛は十分ではなく、私が君や自分自身の願ったような人間ではあり得なかったようにも思えてくる。さらにまた、自分を責め、何もかも極端に見る、いつもの悪い癖が始まるのだ。だから君はもっと悩んでいるに違いない。私が怒りにまかせて口にしたことも、君は本当のことだと思ってしまうのだから。ああ、ついこの数日のために、私はひどく後悔している。ここ数日のことが君の愛に暗い影を落としてしまったことを、かなり気に病んでいる。本当に君につれなくしたとしても、つれなくしたわけではない。たださびしく、悲しかっただけなのだ。私は愚かな人間で、自分の持つ価値あるものや高貴なものを、自虐的かつ盲目的にすべて捨ててしまったのだ」。彼は自分が変化したことがわかりませんでした。不眠症の影響もあるでしょう。「最近のすべてのひどい行動は、すべて不眠症が原因だと思う」と彼も書いています。しかし、チューリヒから次のようにも書いてきました。「私たちが疎遠になっていくような気がする。そうであってはいけないのだが」。チューリヒでは多忙でした。「私が今、どんな気持ちでいるか、君はわからないだろう。潤いがなく、まるで頭以外のものは何もないような感じだ。私を駆りたてるものは、絶えざる野心。この劇場で私が欲しいポジションを得ることなのだ。そのためには、人間としてあらゆる方向に目を向けなければならない。君は私にとってのすべてで、君がいなければ生きたくはない。しかし、今要求されているのは、実直に仕事することで、そこから逃れることはできないのだ。



今は《ドン・ジョヴァンニ》だが、舞台稽古が多すぎ、みんな文句を言っている。一番劣るのがたいていはオーケストラであるのがわかるが、劇場で上演できる作品の中では、こうしたモーツァルトのオペラがもっとも難しい」。また別の機会にも書いてきました。「奇妙なことに、私はあらゆることにあまり楽しみを感じない。自分のどうでもいい日常生活でもそうなのだ。瞑想的で内向きに生きるのに慣れているのだろう」。彼には順応するのが難しかったのですが、自由も奪われていました。彼が指揮した最初の曲は、プフィッツナーの《ゾルハウクの祭》でした [1906年10月31日]。「こういう実践的な仕事は、現場で育ったのではなく、新しく紛れ込んだ人間にはとても手間がかかるのも不思議だ。一日のほとんどすべての時間がリハーサルで占められるだけでなく、たくさん考えることも必要だ。まったくうまくやっていけない人もたくさんいる。だいたい、相手の気を悪くせずに、面と向かって粗野な言動ができるようになるのはもっとも難しいことなのだ。たくさん勉強する必要があるし、今それを経験しているのだ。楽長として劇場で満足のいく仕事をしようと思うなら、全力投球が必要だ。しかし、それができるのは第一楽長として本当に実権を持っているときだけで、いい加減なことに、第二、第三の楽長ではまったく何もできないのだ」。

チューリヒ時代については、たくさん書いてきましたが、彼の手紙も次第に少なくなり、あと数日でクリスマスがやってくる頃、彼自身が婚約を破棄しました。私にとって、別れが決定的なものとなりました。というのも、こうした深い愛を伴った関係が長く続くには、結婚以外の形はあり得なかったからです。

私が貴女に彼の愛に満ちた手紙を紹介してきたのも、その愛がいかに情熱的であったか、私たちがいかに愛情溢れる絆の中で生きていたかを知ってもらうためでした。私はこうした変化には耐えられませんでした。彼の疑念が私の結婚への確固たる期待を壊したのです。彼が抱いたすべての疑念には根拠がありました。彼はそんなに早く結婚できなかったし、私たちは長すぎる婚約期間に堪えられなかったのです。私が情熱的な愛に理想を求めすぎ、彼はその愛に友愛や善意をあてにしていたと思われるかもしれません。しかし、彼がそんなに変わることなく、私に対して落ち着いた態度で接してくれたら、彼を見捨てなかったでしょう。こうして私は婚約解消に同意しました。もはや彼との結婚が、婚約したときのように素晴らしいものではありません。



信したからです。私にとっての大きな希望はすべて失われました。しかし、彼は何も変わらないと言いました。別の誰かに心変わりしたわけではなかったからです。彼には結婚の必要性が感じられなかっただけなのです。彼はチューリヒに戻り、仕事に没頭し、手紙も少なくなりましたが、何も変化はありませんでした。

私には別の男性が現れ、強く引きつけられました。ヴァルターが私にどんなに深い印象を与えたか、彼はまったく気がついていませんでした。婚約を解消したあと、手紙でそのことを書かなかったのは、あれほど高貴で、誠実で、信義に厚い青年に対して、いけないことだったと思っています。彼に対する唯一の負い目です。春に私がヴァルターへの感情について話をすると、彼は驚いただけで、冷静に受け入れてくれました。私は彼を裏切るような気がし、自分を責めるような手紙を書きました。すると彼は、次のような返事をくれました。「君はまったく自分を責める必要はない。君が突然に心をとらえられ、私から奪われるのは、私が本来するべき態度をとっていれば、あり得なかったかもしれないからだ。今はっきりしたのは、すべてが失われたことだ。結婚に必要で結婚に至る愛を十分に意識することなく、突然に失ったのだ。私たちの結婚はもうなくなった。それが別の結婚より素晴らしくて現実的だったかどうかは、誰にもわからない」。同じ手紙にさらに書いていました。「私は限らない官能的欲求に苦しんでいる。ほとんどすべての力が、私から失われたように思われる」。

どんな出会いも人生の時期に左右されます。青春の絶頂にいた私たちに欠けていたものは何もなかったと言えるでしょう。世間から離れて、こうした関係を持てたのは素晴らしいことでした。彼は結婚するには若すぎました。私は彼と歩調をそろえてはいなかったのです。彼はまず仕事に専念しなければならなかったし、状況の変化を押しとどめることはできないのです。しかし、彼が状況にすっかり目覚めると、びっくりするような手紙をくれました。「こんなことがあり得るとはひどい話だが、私自身の責任だ。状況やこれまでやる必要があったことがわからないのだ。しかし、もう他の誰も愛せないほど君を愛していることはわかっているし、そう感じもする。私たちの間には何も障害がないと君に誠意をもって言ってもらえるなら、私はもっとも幸せ

---

(6) ヴァルター・ブラウンフェルス (1882-1954)。

な人間であろうし、平穏にずっと待つつもりだ。しかし、ひとつだけお願いがある。ぜひ聞いて欲しい。私を自由に、ひとりぼっちにしておいて欲しい。私は待っているつもりだ、たとえ一年でも、それ以上でも。そして一人前になるつもりだ。君の手紙がどんなに愛しいか、君にはわからないだろうし、私がこんなにも非情だったとは。私はいつまでも君のものだ。ただ、自分だけの秘密だが」。しかし私が返事を書かないでいると、さらに絶望的になり、涙ぐましい手紙をくれました。「君と何かでいつも結ばれていて、それを乗り越えることが不可能なような精神的不安が私にはある。聖人のように誓いを立てたい。ああ、何とすっかり変わってしまったことか。私を偏見にとらわれた人間だと思てはいけない。少しだけ言わせて欲しい。自分に責任があると君自身を責めてはいけない。君はもっとも素晴らしい人間だ。何も変えることはできない」。彼がいかに寛大で高潔だったかがわかるでしょう。私たちの別れは、ここで書くことができないほどつらく大変なものでした。彼は私を失いたくなかったのです、私を何がなんでも取り戻そうとし、すぐに結婚しようとしてしました。「今の状況はすべて間違っている。できるだけ早く君にまた会いたい。私は希望を捨ててはいない。私の涙が見えるかい。すぐに返事が欲しい。君しか私を慰められない。悲しまないで」。

互いに成長し合った二つの心が別れなければならないとき、深い傷があっても不思議ではありません。しかし、そうあらねばならなかったのです。起こったことや悟ったことは、消し去ることができなかったのですから。

こんな若いときの彼の大きな失望は、愛や結婚に対する考え方を何十年も損ねたに違いありません。台なしにしたとまでは言いませんが。彼自身も、真に相應しい女性をやっと見つけたとき、彼女に「ベルテレが見捨ててくれたおかげで、私はかなり身を崩した」と言いました。私は彼のその後の放縦さには責任を感じていました。この素晴らしい関係を、私ではなく彼が解消してくれるのを望んでいたのですから。

別れるつらさを味わわせないために、親は子どもにまだ若い時期には婚約させるべきではないと思いますか？ 私にとっては、絶対にそんな必要はありません。こうした関係が唯一無二の素晴らしいものであっただけに、彼には言葉では言い表せないほど感謝しています。物事はなるようにしかならないのです。

**【訳者付記】**

1998年11月26～29日にイエーナで開催された第2回フルトヴェングラー学会の  
プログラム冊子<sup>(7)</sup>に掲載されたベルテレ・ブラウンフェルス（1886－1963）の「古い友人への手紙（Ein Brief an eine alte Freundin）」の後半部分の翻訳である。前回は紹介したように、ベルテレ・ブラウンフェルスは彫刻家アードルフ・フォン・ヒルデブラント（1847－1921）の五女。大指揮者ヴィルヘルム・フルトヴェングラー（1886－1954）が16歳のときに婚約した女性として知られる。

後半部分は1906年、フルトヴェングラーが指揮者としてデビューした20歳頃の活動の様子と並行して婚約破棄に至った事情もわかり、もちろん彼女の側からの視点であるとはいえ、貴重な資料と言えるだろう。

五女のベルテレには四人の姉がいたが、その中では三女のイレーネ（1880－1961）が父と同じ彫刻家となり、後世に名を残している。彼女は1907年、父の弟子だったテオドル・ゲオルギイ（1883－1963）と結婚したが、ゲオルギイは1955年、フルトヴェングラーの胸像を制作した。この胸像は、2001年11月に開催された第4回フルトヴェングラー学会で、エリーザベト・フルトヴェングラー夫人からイエーナ大学に寄贈されている。

また、弟で長男のディートリヒ・フォン・ヒルデブラント（1889－1977）は、ローマ教皇から20世紀最大のカトリック哲学者と呼ばれたことで知られている。

ベルテレが結婚したヴァルター・ブラウンフェルス（1882－1954）は、近年の退廃音楽の再評価とともに改めて注目されるようになった作曲家である。1882年にフランクフルトで生まれ、母ヘレーネ（作曲家ルイス・シュポーアの甥の娘）に幼少の頃から音楽の手ほどきを受けた。法学と経済学をミュンヘン大学で勉強していたが、1902年、モットルの指揮するワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》の上演に接して圧倒され、音楽の道に進むことを決意。まずウィーンでピアノを本格的に勉強をし、翌1903年からはミュンヘンで作曲の勉強にも従事。1905年に初めてヒルデブラントの邸宅を訪れ、ベルテレと知り合った。1909年3月25日、E. T. A. ホフマンの

---

（7） Friedrich-Schiller-Universität Jena (hrsg.): Programmheft der 2. Wilhelm Furtwängler-Tage. Jena 1998.

作品に基づくオペラ《ブランビラ王女》が初演されたあと、同年5月5日にベルテレと結婚した。

1913年にアリストパネスの喜劇に基づくオペラ《鳥たち》の作曲を開始するが、第1次世界大戦に召集され、1917年に負傷して帰国。1920年にミュンヘンでブルーノ・ヴァルターの指揮で初演されたオペラ《鳥たち》が、人気を博した。1923年にはプロイセン芸術アカデミーの会員に選ばれ、1925年からは指揮者ヘルマン・アーベントロートとともに、ケルン音楽大学の創設に学長として尽力した。しかし1933年、ナチス政権の樹立とともに、半ユダヤ系を理由に、あらゆる公職から追放され、作品の演奏も禁止され、ボーデン湖畔のユーバーリンゲンに国内亡命し、隠遁生活を送った。戦後はまたケルン音楽大学の再建に尽力し、作品も少しずつ演奏されるようになったが、作風がロマン的過ぎ、時流には古いと感じられたのか、1920年代ほどの人気を回復するには至らなかった。ナチス時代に退廃音楽として演奏禁止された音楽の再評価が進んだ1990年代から改めて注目され始めるようになった。

フルトヴェングラーも戦前はブラウンフェルス<sup>(8)</sup>の作品をよく取り上げているが、その演奏記録を見ても、戦前の人気がよく理解できる。

1913年3月1日（リューベック）	《ピアノ協奏曲》
1917年11月6日（マンハイム）	《三つの中国の歌》
1921年4月1日（フランクフルト）	《ベルリオーズの主題による幻想的幻影》
1921年4月20～21日（ウィーン）	《ベルリオーズの主題による幻想的幻影》
1921年11月23日（ベルリン）	《ベルリオーズの主題による幻想的幻影》
1922年2月3日（ベルリン）	《ベルリオーズの主題による幻想的幻影》
1924年11月13日（ライプツィヒ）	《ドン・ファン変奏曲》初演
1924年11月16～17日（ベルリン）	《ドン・ファン変奏曲》
1925年12月20～21日（ベルリン）	《鳥たち》前奏曲とプロローグ
1927年3月17～18日、4月2日	

(8) Trémine, René (Hrsg.): Wilhelm Furtwängler—Concert Listing 1906–1954. Bezons. 1997.

（ニューヨーク） 《ドン・ファン変奏曲》

1928年2月23日（ライプツィヒ） 《オルガン協奏曲》初演

まだ駆け出しのリューベック時代、1913年3月1日にはブラウンフェルスピアノ協奏曲を、作曲家自身をソリストに迎えて指揮している。マンハイムの楽長時代にも、オーケストラ演奏会で管弦楽歌曲を演奏。1920年に初演された《ベルリオーズの主題による幻想的幻影》は、フランクフルト博物館管弦楽団、ウィーン・トーン・キュンストラ管弦楽団、シュターツカペレ・ベルリンでの演奏会で集中的に取り上げた。1922年、ニキシュの後任として、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団とベルリン・フィルの首席指揮者に就任したフルトヴェングラーは、1924年に《ドン・ファン変奏曲》をゲヴァントハウスで初演したあと、ベルリン・フィルの定期演奏会でも演奏している。さらにアメリカへの二回目で最後の客演となった1927年にも、ニューヨーク・フィルを指揮して同曲を演奏した。1925年のベルリン・フィルの定期演奏会では、人気オペラ《鳥たち》の前奏曲とプロローグを演奏。フルトヴェングラーがライプツィヒを辞任することになった1928年には、オルガン協奏曲もゲヴァントハウスで初演した。しかし、その後は亡くなるまで、一度もブラウンフェルスの作品を演奏することはなかった。

さて、ベルテレはブラウンフェルスとの間に四人の子どもを生んだが、ヴォルフガング・ブラウンフェルス（1911-87）が文化史家・芸術史家として知られ、日本でも『西洋の都市―その歴史と類型』や『西欧の修道院建築』が翻訳されている。夫人のジーグリット・ブラウンフェルス（1914-）も文化史家で、義祖父アードルフ・フォン・ヒルデブラントの作品を詳細に紹介する貴重な文献も出版している。この二人の二男シュテファン・ブラウンフェルス（1950-）は建築家として有名で、アルテ・ピナコテークとノイエ・ピナコテークに続く現代美術のための美術館としてミュンヘンで2002年に開館したピナコテーク・デア・モデルネを設計した。